

## 「平成30年度 主任保育士・主幹保育教諭研修会」報告書

- 【期 日】 平成30年11月1日（木）  
【会 場】 アバンセ  
【主 催】 佐賀県保育会  
【参加者数】 147名  
【内 容】 研修1 12:00～ 15:00



『新指針のもとでの主任保育士の役割～指針の求める子ども観、保育観を考える～』  
講師 汐見稔幸 氏 （東京大学名誉教授・日本保育学会会長）

### 研修1 『新指針のもとでの主任保育士の役割

～指針の求める子ども観、保育観を考える～』

講師 汐見稔幸 氏 （東京大学名誉教授・日本保育学会会長）



※子どもの心には二つ（A、B）の働きの部位がある。

A：これは何だろう？こうしたらどうなるんだろう？

もったきれいにならべよう！ここに、いっぱい積み上げてみよう！・・・

◎言われなくても、自分で何かをしようと動く部分、それを指示する脳の部分

B：こうすれば大人はほめてくれる、ああしたらしかられる、だから・・・

こう積みば大人はがんばったねといってくれる、だから・・・

◎世間で、これがいい、これが正しい等といわれていることに合わせていこうとする  
脳の部分

A、B、2つの比率、割合、バランス

- Aは自分脳、Bは社会脳、といえる
- 大人になるとは・・・Bを増やし、洗練していくこと
- 子ども=A>B 大人=A<B
- 実際には A、Bは複雑に絡み合っている。（年齢とともにAが減ってくる）

※Aの例を考えてみると・・・

- ・本棚の本を次々と落としている子ども、ふすまに指で次々穴を開けていく子どもについて考える。(なぜ、ここでこんなことをしているのか理由を考えることが、主体的保育で子どもの心を考え共感するのが保育士である。子どもが何をしたいかを理解し、支える保育士がいて、探索活動をたくさんやらせてくれる園がいい園である。)
- ・泥団子、粘土、型抜きした土、いろいろな形の石、収穫したサツマイモ、椅子、人参など、子どもが並べた写真の画像を見て考える。(子どもは並べたがる、そういう感性がある。微妙にいびつにする。そして、秩序を作ろうとする。しぜんには直線はない。)
- ・子どもの絵について考える。(絵の指導は難しい。保育士は子どもに「これ、貼っていい？～していい？」と尋ねたり、相談したりしているか。子どもはきいてもらえる嬉しさを感じ、自分も相手にきくようになる。絵は自分の好きなように描いていい。それがいいと自分が思ったら、まねをするようになる。描き方は教えてもらったものではなく、子どもの心の中のAが描かせている。)

- ・したいことを自由にさせてあげることで、子どもは自分が何をしたい人間なのかを徐々に見つけていく。Aの活性化、豊かさは、自分を知る力の育てにつながる。
- ・大人になることは、Aを大事にして、しだいにBと折り合いをつけていくこと。
- ・教育、保育は、Bを早く身につけさせようとするのではない。Aをできるだけ外に出させ、それを徐々に子どもの納得を得て、丁寧にB化していくこと。
- ・Aを大事にするには、興味ある環境を用意し、それを使い活かしながら、自由に子どもの要望を形にさせてあげる。(横の発達を大事にする)
- ・下手にほめない(ほめる=Aを早く身につけてねの誘いかけになる)
- ・子どもの土俵に入って、人間として接する。Aを認めるとBが身につく。子どもに素直な意見を聞く態度が大事。深く愛されているということがわかるとがまんができる。がまんすることができる子は幼い頃からアタッチメントがしっかり育った子である。

～ある保育士の2歳児の子どもたち(ブランコの場面)の記録より～

- ・子どもたちの姿から、自分が満たされて、初めて、人を想う気持ちが生まれてくる。この時期には、まずは自分が満たされていることがとても大切で、それが必要だと感じる。そうすることで、子どもの意識の中にいつしか、時期がくると、葛藤が起こり始める。そして、かたくなな気持ちに変化が起こる。
- ・カリキュラムには、表のカリキュラム(先生の指示をしっかりと理解すること)と裏のカリキュラム(指示がなければ好きなことをしていい、自己コントロールができない)がある。裏のカリキュラムがあることを考えて保育をしなければならない。
- ・非認知的スキルは、一生続く、赤ちゃんの時から身につけていく。
- ・指示の少ない保育を目指す。帰りに振り返りの時間を作る。大切なことは「見える化」する。振り返りの共有「～ちゃん、～したけど、どうだった？」ときく。しかけは難しいが理由を考える。

(報告)

新保育指針が求める子ども観、保育観ということを考えながらの研修であった。環境の変化が著しく、社会はロボット化、キャッシュレス等で人と直接かかわる必要がなくなるため、対人関係の情報処理が難しくなる。これから保育の見直しが必要で、保育士は子どもに共感し受け止め、子どもの心の中で起こっていることに応答して、子ども主体の保育をしなければならないと痛感した。保育も教育ということを念頭に置いて、夢中になって遊べる環境を作り、非認知的スキルを保育の中で意識的に育てていくことが大切である。主任保育士として、そういうことを職員同士議論し、子どもが自分で考えることや人とかかわることが大好き、体を動かすことが好き、アートが好きな子どもに育てていかなければならない。

(文責：砥川保育園 轟木和美)